

巻 頭 言



魅力ある補綴歯科学会へ

鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座 大久保力廣
Chikahiro Ohkubo, DMD, PhD

(公社)日本補綴歯科学会は1933年に創立された日本で最古の歴史を誇る歯科専門分科会の一つであり、輝かしい伝統を継承し歯科臨床や歯学研究を牽引しながら国民の健康に大きく貢献している学術団体です。この伝統ある学会の理事長(2025年～2026年)を拝命することはこのうえない栄誉と思っています。これまでの歴代理事長の錚々たるお名前を拝見するだけで身の引き締まる思いですが、本学会の発展に向けて誠心誠意尽力する所存です。

「補綴」とは何かを今一度原点に立ち返り熟考してみれば、まぎれもなく臨床医学の一分野である以上、私たちは改めて歯科補綴学の実利や目的が臨床にあることを強く認識するべきではないでしょうか。補綴医は最終の治療像を創作、管理するフィニッシャーであり、保存、口腔外科、矯正歯科等の関連診療科のコンダクター的役割が強く求められています。そのためには、専門的かつ総合的な知識と診療技術だけでなく、多様な臨床経験も身に付けなくてはなりません。加えて、補綴術式や診療アウトカムをイノベティブに発展、向上させるためにも、デジタル技術、分子生物学、歯科材料学、医工学、情報学、疫学、老年学、栄養学などの多分野、あるいは異分野と協働、融合して補綴臨床に資する基礎的・臨床的研究を積極的に推進する必要があります。その結果、単に専門的技術を駆使して補綴装置を製作、装着することを主眼としてきた従来の補綴治療から脱却し、生命科学を基盤とし患者の健康や生きる喜びに貢献する Prosthodontic Medicine¹⁾に発展していくのだと思います。今期、補綴歯科学会が取り組む課題として、

- 1) 補綴の社会的プレゼンスをさらに高め、本学会の将来を担う若手臨床家や若手研究者をサポートし育成する。
- 2) 世のデジタル技術の進化に併走して、補綴術式や補綴装置製作のデジタル化を加速させるとともに新材料の開発、改善に努める。
- 3) リアルワールドデータの集積に向かう歯科界の潮流の中で、特に補綴難症例レジストリ・データベースを構築する。
- 4) 歯科訪問診療や口腔リハビリテーションの需要は著しい増大傾向にあることから、在宅や介護現場での補綴診療のあり方を示唆する。
- 5) 海外学会との協定を基盤として国際交流を推進するとともに、国内学術団体との連携を通じて本学会の役割と価値観を再確認する。
- 6) 補綴診療を高次元で大きく進化、発展させるため、AI技術の導入、活用を検討する。

等が挙げられます。特にAIに関しては性能が加速度的に向上することを常に念頭におきながら、学会としてもAIの活用法や向き合い方を真剣に考えなければなりません。こうしたデジタル技術やデータベースを基に、こ

れまでは表現しにくかった「補綴」とは何かを具現化し、補綴の魅力を全学会員で共有し理解していくとともに、その必要性を国民に向けて発信していくことが、本学会にとって重要な使命と考えています。

さて我が国の補綴は、接着、インプラント、再生、デジタルといった医療技術の大きな革新を基盤に、飛躍的に進化、発展し、深奥さと多様性を増してきました。その結果、補綴のアイデンティティーが理解しにくくなってきたことも事実です。それぞれの専門領域には特化した学会が存在しており、トレンドを創出、展開していますが、本学会は歯科治療上の職責から、それらを含む立場にあるため、各学会にアライアンスの締結を呼びかけリーダーシップを発揮することも大切です。補綴の独自性を掘り下げることが重要ですが、この多様性こそが補綴の強みであることも忘れてはなりません²⁾。

もちろん言うまでもなく、補綴歯科学会には大学人だけでなく一般臨床家のご要望にも応える魅力ある学会活動が求められています。研究発表に偏重するのではなく、多くの勤務医や開業医、若手・中堅臨床家やコデントスタッフ、学生が参加したくなる補綴臨床、研究に関するトピックスや最新情報の提供、臨床技術の基礎から最先端までを網羅した学術大会の企画や読意欲の高まる学会誌の編集が望まれます。さらに私たちの大切なパートナーである歯科技工士、歯科衛生士との連携をこれからも強化することが、トータルの補綴治療の向上につながるものと確信しています。

一方、歴代の理事長が苦心して種を蒔かれた「補綴歯科専門医」が、ようやく馬場元理事長の時に発芽し、窪木前理事長の代で順調に成長しています。現在も運営の詳細に関しては専門医機構と相談しながら進めているところですが、本学会の機構認定専門医の管理・運営は他学会が模範とし注視するところであり、国民目線を重視した制度の意義をよく理解しながら、結実に向けて推進していかなければなりません。そのためにも「補綴」という用語の国民への周知は必要不可欠です³⁾。本学会もこれまで、歴代の各種委員会の献身的なご努力により、「補綴の日」を記念日登録し、補綴学会のマスコットキャラクターを創作し、補綴歯科の専門性を明示したリーフレットやHP、各種ポスターを作成してきました。しかしながら、「補綴」という用語の一般への普及はいまだ低調であり、補綴歯科の重要性に関する国民の認識も低いと言わざるを得ません。今後は周知に向けてマスメディアやSNSを活用した広報活動も積極的に展開したいと思います。

とはいえ、「補綴歯科専門医」自体がまだまだ少数であり、本学会はより多くの専門医、指導医を育成、輩出するべきと考えます。まずは若手会員が補綴の基本をしっかりと身につけられる研修体制を強化し、専門性の向上と役割を明確化しながら、専門医を取得したくなるよう補綴診療の魅力を掻き立てなければなりません。年度末に開催された本学会若手教授による会員増対策検討WSと理事による将来構想WSでも、国民に尊敬される補綴歯科専門医を目指して、自己研鑽をベースに臨床技術向上のためのシステムづくりが短期計画として掲げられました。また専門医を取得することのメリットやインセンティブを明示し、専門医となって最新情報を入手し更新し続けることの価値を高める必要性が再認識されました。今後は専門医取得までのロードマップを提示し、専門医取得とその更新に有益となる臨床に直結した学会運営を目指していきたいと思えます。

数多くの研究結果から、健康寿命の延伸やQOL向上に「補綴」の重要性が実証されてきており、私たち補綴医の躍動が強く求められる時代となりました。今こそ、(公社)日本補綴歯科学会は伝統と先進性を両立させた魅力溢れる学術団体へと会勢拡大するためにも、全学会員が自信と誇りを持って、「補綴の力」を結集するべきだと思います。会員の皆様のあたたかいご支援、ご協力を心からお願い申し上げます。

文 献

- 1) Koyano K. Toward a new era in prosthodontics medicine. J Prosthodont Res 2012; 56: 1-2.
- 2) 特別企画 座談会 公益社団法人 日本補綴歯科学会のこれまでの10年間を振り返り補綴のアイデンティティーと将来像を語る. 日補綴会誌 2018; 10: 271-89.
- 3) 大川周二, 松村英雄, 市川哲雄, 馬場一美. 補綴歯科専門医の機構認定までの道程. 日歯連合誌 2023; 2: 6-12.